

特集序言

「修復・保存の化学」の企画と編集にあたって

関根知子

(資生堂グローバルイノベーションセンター)



日本史が好きでよく京都や奈良に出かけますが、国宝級文化財の修復後のあでやかな姿を目にする度に、一体どんな人が、どんな風に行っているのだろうといつも思っていました。何年か前の国際コロイド学会で、イタリアの教授が発表されていた絵画の修復に関する研究の話聞き、案外身近な技術が使われているのに驚いたと同時に、日本の文化財の修復技術に興味を持ったのがこの特集を企画したきっかけです。

今回幸運なことに、日本における各分野の第一人者の先生方に、執筆をご快諾頂きました。なかなか目にする機会のない、修復・保存の世界を紹介して頂きます。

東京文化財研究所の早川典子先生には、日本画の修復について分かりやすくご説明頂くとともに、伝統的な古糊を人工的に調製する手法や、コーティング剤として用いられるPVAの除去技術をご紹介頂きました。後者においては、PVAで修復した資料が、経年でPVAの劣化を生じ、再修理ではそれを除去できずにいる現状に取り組んでおられます。

元興寺文化財研究所の金山正子先生には、和紙の修復について解説頂きました。和紙ならではの難しさがある一方で、修復の途中で予想していなかった情報が発見されることがあるというエピソードにワクワクさせられます。伝統的な手法と最新技術のコラボ事例や海外との協力事例も紹介されています。

白岩修復工房の白岩洋子先生には、写真の修復についてご執筆頂きました。文化財の修復家そのものが少ない中、特にこの分野の専門家は限られており、大変貴重な技術の紹介となっています。写真に興味のある方は特に必見です。

最後に沓名弘美先生には、中国の歴史書や医学書を紐解きながら、古代と同じ手法で「エンジ色」を再現するという研究についてご紹介頂きました。修復とはまた違った観点で、文化財の保存を試みている貴重な例です。なお文中の綿臙脂は、温かみのあるピンク色を発色するそうです。

本特集を振り返り、日本の文化財は今回ご執筆頂いた先生方を始め、先人たちの根気強い地道な研究に支えられ、守られているのだと強く感じました。この特集が皆様の研究のみならず、普段の生活における活動の中での、有益な気づきにつながれば幸いです。

また今回図らずも、企画者、筆頭執筆者ともに全員女性（本誌初）となり、カラーの図表と併せて華やかな？紙面になりましたこと、嬉しく思っています。

末筆ながら、本特集にご理解を頂き、お忙しい中ご執筆頂きました先生方に、深く感謝とお礼を申し上げます。